

日本の野生植物栽培記録② ～サクラソウの植栽環境の検討～

井上尚子

植物公園の中心部にあるため池、通称「かくれ里の『うらら池』」の北西部には、倉重川の分流が流れ込む水路と、園内の湧き水が流れ込む水路の2本があり、周辺には100㎡程度の湿地がある（写真）。我々はここに広島県北部の湿地性の里山植物であるサクラソウの群生地を演出できないかと考えた。そのために日当たり、水位など環境条件の異なるいくつかの場所にサクラソウを試験的に植栽して、最適な植栽環境を検討した。



写真．うらら池北西部の湿地

2008年3月、3つの異なる環境条件の植栽区を設けた（表1）。面積はそれぞれ約3㎡である。

2008年3月4日～17日、植栽区A、B、Cに、野生のサクラソウの開花見込の芽をそれぞれ100前後植えつけた。植え付けのときは、植栽区内の自生植物は根から全て取り除き、現地の土に、5分の1程度、新しい用土（腐葉土、ぼら土、赤玉土など）を混合した。

植え付け後の生育状況は、表2に示した。

植栽区Aは、春開花した花茎は20あったが、12月の時点で新しい芽は確認できなかった。植栽区Bは、開花した花茎は5で少なかったが、12月には開花見込みのある芽が20形成されていた。また植栽区Bで芽を確認したのは、冠水することが少ない部分であった。植栽区Cは、開花した花茎の数も、新しい芽も、一番多かった。

今回の結果から、サクラソウは冠水することが多い場所では生育できないことが分かった。同じ冠水しやすい場所でも、植栽区Aは湧き水の流れのそばにあり、植栽区Bは農業用水のそばにあるため、植栽区Aが池の水位が下がっても常にじとじとしていたのに対し、植栽区Bは農業用水の使用がない開花期には水没し、その後5月以降は冠水しなかった。その影響が両区の花茎の数と芽数の変化の仕方に表れたと思われる。

今回の結果は、広島県北部のサクラソウ自生地が落葉広葉樹の疎林内の傾斜が緩やかな水流のほとりの冠水しない場所にある事実と矛盾しない。

また、植栽区Cではサクラソウの芽数が増えた。少なくともここでは、今回同様の管理、すなわち春先の抜根除草と、適切な施肥によって良好な植栽条件が得られることが分かった。

今回詳細な調査を行なわなかった冠水期間および光条件のコントロールや作業効率のよい管理方法については、今後検討を要する。

最後に、調査についてご協力いただいた、広島市植物公園友の会山草部会および植物公園管理ボランティアの有志に御礼申し上げます。

表1. 植栽区的环境条件の概略

植栽区	日当たり	水条件
A	春先は1日中良好。夏は草陰になる。	湧き水の水路がそばにあり、1年中土壌水分が多い。水位が上がると冠水する。
B	午前中は良好。夏は草陰になる。	倉重川の分流が流れ込む水路のそばにある。Cよりは池に近く、水位が上がると8割冠水する。
C	午前中は良好。夏は草陰になる。	倉重川の分流が流れ込む水路のそばにある。池の水位が上がっても冠水することはない。

表2. サクラソウの生育状況

植栽区	2008年4月29日に開花していた花茎の数	2008年12月11日に確認した芽の数。()内は開花見込の芽の数
A	20	0 (0)
B	5	57 (20)
C	88	232 (160)